

第二部 / 芸術情報プラザの情報コーナー

「推薦します」 芸術情報プラザの推薦コーナー

日本における芸術創造の挑戦は、西欧の文化芸術と遭遇した明治以来の課題。歴史的には、一つは、西欧芸術を超えること。二つ目は、模倣追従の域を脱すること。三つは、日本の伝統芸能の創造的継承。四つは、国際的な評価etc。もちろん芸術創造の評価のメルクマールはジャンルによってさまざまですが、基本的に芸術創造評価や活性化に欠かせないのが、非日常である作品の「煌く完成度」と作品のオリジナリティ。これらの全ての要素を求めて表現者・集団と出会い多くの聴衆・観客のサポートを得たいと願います。今回の推薦は、舞踊における作家というべき「振付者」及び地域で優れたレパートリー公演を可能にしつつある劇団あしづえの「二十夜待ち」、伝統芸を普及する「邦楽にぎわいカレッジ」です。題して「評価された舞台センス」。

振付者の時代を迎えた世界の舞踊界 わが国の旗手として期待される矢上恵子

芸術情報プラザアドバイザー
うらわ まこと

振付者がお客を呼ぶ時代

現在上演されているバレエは、およそ200年と少しの歴史をもっています。その大きな流れを見ると、まずトウシュウズの発明によって妖精が主役となる「ジゼル」や「ラ・シルフィード」などの『ロマンチックバレエ』が生まれ、それがマリウス・プチパヤレフ・イワノフによって形式的に完成された『クラシック・バレエ』が登場します。チャイコフスキーの3大バレエがその典型です。

さらにその形式化に対抗して20世紀初頭にディアギレフのバレエ・リュスが組織され、ミハエル・フォーキンなどのモダン・バレエが作られるのです。

このバレエ・リュスが解散したのが約70年前(1929年) 此のメンバーが世界に広がって、イギリスやアメリカにもバレエの種がまかれたのです。それまではバレエはロシア、フランス、イタリアが中心でした。そして第2次大戦後、平和になった世界にバレエ、そしてそれに対抗して20世紀初頭に生まれたモダンダンスが急激に花開き、20世紀後半はダンスの世紀ともいわれるようになったのです。

この数十年、バレエの世界では次のようにいわれることがあります。まずガリーナ・ウラノワ、マーゴット・フォンテインなどのバレリーナの時代、そしてルドルフ・ヌレエフやパリシニコフなどの亡命によって男性ダンサーの時代といわれるようになり、さらにベジャール、ノイマイヤー、キリアン、フォーサイスといった振

付者の時代になったのです。これは端的にはお客さんが、なにに惹かれて劇場に来るかということです。現在は、もちろんギエムのような女性、ウラジーミル・マラーホフのような男性といったお客を呼べるダンサーもいますが、最近では、現代舞踊界との交流も進み、ピナ・バウシュ、マッツ・エックなども含めて、スターでなく、上に挙げたような作品でお客を呼ぶ振付者が増えてきたのです。

わが国では振付者の時代はまだこれから

ひるがえって、わが国ではどうでしょうか。わが国のバレエの歴史は戦後に始まったとっていいと思いますが、やはり最初は谷桃子や、森下洋子などのバレリーナの時代でした。それが現在では、下村由理恵、草刈民代など優れたバレリーナももちろんたくさんありますが、熊川哲也、佐々木大、西島正博など、写真集を出したりして大勢のファンをもつ男性舞踊手が増えてきました。

では振付者はどうでしょうか。残念ながら作品でお客を呼べる振付者の時代とはまだいえないようです。それは次のような理由ではないかと思えます。まず、とくに東京の主たるバレエ団が、古典中心であること(現在、古典が最も盛んなのは日本だといわれています)そして創作作品もほとんどが海外の著名な振付者のものを取り上げる傾向があることです。たしかに、日本人の創作をとりあげることはあるのですが、お客の入りはあまりよくありません。これは作品の質よりも日本の観客が古

典と海外のブランド好みのせいだと思います。

しかし、私は日本にも優れた現代的な感覚をもった振付者がバレエ界にも出てきている（モダン/コンテンポラリー系ではもう何人もいます）し、少しずつですが認められてきていると思います。

たとえば、振付で公的、私的な賞を受けている人も何人かはいます。ただ、東京ではなかなか機会がなく、東京以外で関心あるグループが取り上げることが多いのです。

注目すべき矢上恵子

私は、これからクローズ・アップして欲しいし、間違いないとされるであろう振付者として、金森穰、矢上恵子、そして川口節子、さらに振付指向宣言をした篠原聖一が本格的に振付の研究を始めるそうですので彼にも期待したいと思います。

このなかで、金森は東京での発表の機会も増えてきていますし、一方名古屋の川口節子はしばらく地元名古屋で頑張っていて実績をつけてからでいいと思いますので、ここでは大阪に本拠をもつ矢上恵子を取り上げます。

矢上香織、久留美、恵子、3姉妹が主宰しているケイ・バレエスタジオ、もともとはクラシックの出身で現在もスタジオとしてはクラシックが主体ですが、この末妹の恵子がコンテンポラリーに傾斜を強めているのです。前からそのことは聞いていましたが、彼女の名前が東京に大きく伝わってきたのは、1999年に名古屋で行われた第3回世界バレエ&モダンダンスコンクールで、クラシックバレエ部門シニアで金賞を受賞した田中ルリのために振付けた「アコーダンス」で振付特別賞を受けたことです（その前に京都で見えています）。

そして私が初めて意識して彼女の作品を見たのは、翌2000年、東京での公演ラバーダンスで佐々木大など男性5人のために振付けた「ダイア」でした。ラヴェルのボレロを使ったこの作品は、ダンサーがリハーサル中に吐いたといわれるほど激しく、ダイナミックに観客の心を揺さぶりました。

その年、もう一度大阪で「ダイア」そして「アコーダンス」の拡大版、さらに今年大阪で「ヴィヴィル×6」、「カルメン組曲」、さらに「ヴィヴィル×6」を芯に拡大した「Jour」を発表しています。それ以外にも、振付者として名前は出していませんが、お弟子さんである福岡雄大、福田圭吾、福田紘也らのコンクール作品も含めて、彼女の作品の多くを見る機会がありました。そのすべてに一貫しているのは激しい、ダンサーに極限の動きを要求するダンススタイルです。しかし、決して無闇に動き回らせるだけでなく、主張や情緒性もあり、ユーモラスな側面ももっています。

タイトルについても「ダイア」はダイヤモンドとともに「(佐々木)大や」、チャイコフスキーの「眠れる森の美女」の6人の妖精（元はもちろん女性）の踊りの音楽で男性に踊らせた「ヴィヴィル×6」は、そのダンスのきつさに「びびる6人」の意味を含ませるなどなかなかのセンスももっているのです。

今年の3月、日本バレエ協会の「ヤングバレエフェスティバル」に「ダイア」が取り上げられることになり、多くの人に彼女の作品の魅力を認識してもらう機会になるでしょう。また別稿にもあるアートマネジメント研修の舞台上、福岡雄大も彼女の振付作品を踊ります。また付け加えますと、同じ舞台上浅見紘子が篠原聖一の作品を踊ります。

いずれにしても、バレエ界もほかのジャンルのダンスとともに、このタイプの現代的な感覚の作品、振付者にももっとファンが増えて欲しいものです。

矢上恵子はその旗手といえるでしょう。

問い合わせ

ケイ・バレエスタジオ（矢上）

〒552-0021 大阪市港区築港1-1-5

TEL:06-6571-3445 FAX:06-6571-3442



「Jour」

撮影：STUDIO URANUS



「Daia」